大学が豊田キャンパスへ移り、剣道部合宿所と一般女子学生寮（松風寮）の寮監となったため、家族離ればなれの生活を余儀なくされた。妻の母たつから「家族はできるだけ一緒に生活しなければ駄目だ。離れ離れの生活では子供の教育に良くない」と指摘され、豊田市内に小さな家を構えることにした。

義母からは、転居にともない三つの教訓を授かった。一つは「ところ変われば水に気を付けよ」。二つ目は「近くに良いお医者さんを探せ」。三つ目は「遠くの親戚より近くの他人」だった。お医者さんは、近くの牧原良行医師に巡り合い、現在も親しく家族ぐるみのお付き合いをさせていただいている。以前、カニを食べ過ぎて全身アレルギーになり呼吸困難に陥ったとき、夜中に往診に来ていただいた。先生は気さくな方で、しかもスポーツ好き、話題が共通し楽しいひとときを過ごすことのできる人である。また、近くの他人では、隣の藤原英明さんご夫妻と親戚同様のお付き合いをさせていただいている。平成十三年の春、妻が腰痛で入院したときは奥様のまさ子さんにいろいろと面倒を見ていただいた。義母の残してくれた教訓は今も生きている。

集団脱走事件

剣道部は、武道館が完成したことで一年生から四年生まで全員一緒に稽古ができるようになっ

た。大所帯になったため剣心寮一つでは入寮希望者全員が入りきれず、豊田キャンパスの近くに新たに秀道寮を作り、学年ごとに分けて入寮できるようにした。

ある時、その剣道部寮で事件が起きた。それは三年生の集団脱走事件であった。三年生はすでに上級生としての自覚を持ち、生活習慣も身についていると思っていただけに残念な出来事だった。事情はこうである。

四年生が名古屋キャンパスから移動してきた。これで流れがガラッと変わった。それまで最上級生だった三年生が、突然四年生の下に入ることになった。その結果、四年生のやり方にはついていけない、ということになって三年生全員が寮を飛び出し、実家へ帰ってしまったのである。四年生の言い分は、「我々は一年生の時から、寮生活の掃除、洗濯、食事当番、先輩たちの世話を三年間ずっとやってきた。ところが、今の三年生はずっと上級生で何もやってきていない。それをやってもらうだけだ」というものであった。

私は、豊田校舎で三年生以下を指導してきたので、三年生の気持ちはよくわかっていた。すぐ寮に戻るように部員の実家へ電話をしたが、らちがあかなかった。

指導陣の中でも、「そのままにしておけば良い」という意見と「すぐ呼び戻せ」という意見に分かれた。話し合った結果、近藤利雄剣道部長の名前で寮を飛び出した三年生部員全員の実家に

手紙を出すことに決まった。

手紙の内容は「すぐ寮へ戻れ。戻らない場合は退部にする」というものだった。この手紙を読んだ三年生は、それぞれに話し合ったようで、数日後、全員寮に帰ってきた。

しかし、この事件後、剣道部は、まったくまとまりのない状態になった。稽古にも気合が入らず、ひどい状態だった。剣道の稽古は、剣を交えての人と人の対話であり、相手を尊重し、心を通わせて稽古を行わなければ駄目である。この年は強い選手がたくさんいたが、当然のことながら大会での成績は振るわなかった。

当時は、全国的に学園紛争が最も激しい時代であり、他の運動部もやはりトラブルが絶えなかった。

この事件を通して学んだことは、いかに人間の「和」が大事であるか、その上で、指導陣、部員が一丸となって、目標に向かって努力することができるか、であった。

事件後、剣道部は改めて大学日本一を目標に掲げ、日夜稽古に精を出した。ところが、また新たな問題が派生した。選手候補を中心とした稽古内容に対して、選手候補以外の学生から不満が出てきたのである。当時は、大学の民主化運動が流行し、すべての面で民主的な運営が叫ばれた。指導陣も大学日本一を目指しての指導方針になっており、選手候補に選ばれなかった者に

は、不平不満の残る指導内容であったに違いない。

剣道部監督に就任

昭和四十九年、前任の恵土孝吉監督の後を引き継ぎ、私は中京大学剣道部監督となった。私のような浅学非才なものが監督を務められるかどうか不安もあったが、やるしかなかった。これまで諸先輩が築き上げてきた剣道部の伝統を守り、さらに発展させよう、並大抵なことではできないがやるぞ、と身の引き締まる思いだった。監督就任時に考えたことを振り返ってみたい。

第一に考えたことは、「良き環境設定」であった。遠征をしたとき、強いチームは、例外なく、道場の雰囲気がすばらしかった。剣道場に入った時、ピンと張りつめた空気を感じた。気合の入った稽古を全員が行えば、それが可能だろうと考えた。

第二に「民主的な運営を図る」ことであった。主将を中心に副将、主務、そして四年生がいかに模範を示して良きリーダーシップがとれるかであった。それを自然な形で下級生の三年生、二年生そして一年生に、速やかに間違いなく伝達できる指導態勢を考えた。

私が監督になったときの主将は、諏訪文夫君（國學院栃木高校出身）、温厚で真面目な人柄だっ